

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（分担）研究報告書

青森県内の二次医療圏におけるがん拠点病院の役割に関する研究
研究分担者 松坂 方士 弘前大学医学部附属病院 医療情報部 准教授

研究要旨

青森県がん登録データを解析した結果、拠点病院へのがん医療の集約化が進行していた。二次医療圏に拠点病院以外にがん診療を担う医療機関がない場合、集約化によって拠点病院のキャパシティーを超える危険性がある。

A. 研究目的

がん拠点病院は二次医療圏に1施設を目安として、主に主要5部位のがん診療を担っている。その一方で、医師不足や自治体病院の財政状況の悪化などにより地方ではがんを診療できる医療機関が集約化されている。そのため、がん拠点病院の役割が大きくなっている反面で、キャパシティーを超えた診療となることも懸念される。今回の研究は、青森県がん登録データを解析し、がん拠点病院が二次医療圏のがん医療に占める割合を検討した。

B. 研究方法

平成 25-27 年青森県がん登録データを解析し、青森県内の二次医療圏におけるがん診療連携拠点病院ががん患者の診断に占める割合を検討した。これらを部位（胃、大腸、肝臓、肺、乳房）別、および診断年別で比較した。

C. 研究結果

拠点病院が診断に占める割合は、拠点病院以外にがん診療病院がない二次医療圏で最も高く、拠点病院以外にがん診療病院が存在する二次医療圏が次に高かった。拠点病院がない医療圏が最も低かった（この二次医療圏で拠点病院で診断された患者は、すべて他の二次医療圏に移動して診断された患者である。）。

全部位、胃、大腸、肺では、平成 25-27 年の間に圏域内に拠点病院が存在する二次医療圏では拠点病院が占める割合が高くなり、逆に圏域内に拠点病院が存在しない二次医療圏では拠点病院が占める割合が低くなっていた。

また、肝臓では、圏域内に拠点病院が存在する2つの二次医療圏で、拠点病院が診断に占める割合が低くなっていた。

D. 考察

青森県では、がん医療の拠点病院への集約化が進行していることが明らかになった。このことは、がん医療の均てん化にとっては好ましいことだと思われた。しかし、二次医療圏に拠点病院以外にがん診療を担う医療機関がない場合、集約化によって拠点病院のキャパシティーを超える危険性があり、肝臓がんで割合が低くなった2つの二次医療圏では、そのような現象が起きていないかどうかを注意深く観察する必要があると思われた。

E. 結論

がん医療に占めるがん拠点病院の割合が高くなること、すなわちがん医療ががん拠点病院に集約されることは、がん医療の均てん化にとっては好ましいことである。しかし、過度の集約によって拠点病院のキャパシティーを超える危険性があることも十分に考慮してがん医療計画を立案、実行する必要がある。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし